

2022年11月20日 半田朝礼拝

午前 10時30分

司会 大谷京子

奏楽 橋本 恵

前 奏

招 詞

詩編第126篇 5節-6節

讃美歌

讃美歌 21-51-1 (愛するイエスよ)

交 読

詩編第42篇 (讃美歌 21 p. 46)

祈 禱

聖 書

使徒言行録 第17章 22~31節

(新約 p. 248)

讃美歌

讃美歌 21-59-3 (聖書にしろされた)

説 教

パウロがアテネで説教をするところから始まりま

す。「あなたがたが信仰のあつい方であることを、わたしは認めます」。「信仰のあつい」というのは、今の言葉で言うと、「宗教心が豊かである」と訳してもいいと思います。あなたがたが宗

教心を持っているということは分かります。どうしてかと言え
ば、道を歩くと、あちらこちらに偶像が建てられている。しか
も、そのなかに、わたしはおもしろい祭壇を見つけた。「知られ
ざる神に」と刻まれた祭壇を見つけたのです。この「知られざ
る神」に献げものが献げられているというのはこういうこと
です。まだ自分たちは知らない。知らないけれど、まことの神さ
まがおられるはずだ。まことの神さまがおられるのであれば、
どうかわたしたちの献げものを受け入れていただきたい。そう
言って、自分たちがまだ知らない神に献げものをする祭壇があ
ったというのです。

ところがパウロは言います。あなたがたが知らないで拝
んでいる神さまは本当におられます。生きておられるまことの
神さまです。そのまことの神さまを、わたしは皆さんにご紹介
いたします。しかもパウロは「アテネの人たちは自分たちの考
えにこだわっていて、ちっともこころを拓こうとしない」とい
うような居丈高になって、抑えつけるように、いきり立って、

それを批評して、相手を理屈で言い負かしても、相手のところは拓かれません。パウロはここでいきり立ってはいません。好奇心で話を聞こうとしている人たちを拒んだりしてはいません。喜んで語ります。そして、「あなたがたにそのまことの神さまを教えます、紹介しますから、どうぞところを拓いていただきたい」と言います。知らない神、知られざる神から、まことの神に帰っていただきたい。そう語ります。そして、生きたまことの神さまの紹介を始めましたときに語ったのは、「**世界とそ**の中の万物とを造られた神が、その方です。この神は**天地の主**ですから、手で造った神殿などにはお住みになりません」という言葉です。神は万物を造られた方である。創造者としての、すべての物の造り主としての神について語り始めます。

そしてそれに付け加えて、万物を造られた神はすべての物を超えた神である。それは言い換えると、それらの物によって束縛される神ではないということです。すべての物を超越しておられる。それはもっと具体的に言えば、神は人間の手で造

った神殿に住んではおられないというのです。

最初にアレオパゴスという言葉が出てきますが、ここは裁判所があったところだそうです。ですから、ここでパウロは裁判所に引き出されたのではないかと考える人もあります。裁判所での弁論だったかもしれません。けれど、その裁判所のあるアレオパゴスの丘で、多くの人たちが集まって、議論に明け暮れていたということも考えられます。市場のようにそこで商売が行われていたわけではありません。いかにも哲学の都アテナらしい、みんなが集まっては議論に明け暮れる場所があったと考えることができます。

一般に、パウロのアレオパゴスでの説教は、この使徒言行録が伝えている他のパウロの説教とはずいぶん趣が違います。それだけでもみんなが関心を抱いたものです。どうして、こういう独特の言葉を用いて、独特の内容を持った説教になったのだろうか。

古代から今に至るまで大きな影響を与えている哲学を生みだしたアテネの町で、その哲学の伝統を誇りとしていた人たちがいました。ここでパウロの言葉に耳を傾けた人たちは、どちらかというといんテリ、知識階級に属する人たち、知識人だと思います。その当時のいんテリに対してパウロが伝道説教をしました。わたしたちもキリストを伝える、証しするとはどういうことかを考えるときに、このパウロの説教から学ぶことは無意味なことではありません。

さて、先ほど言いましたように、他のパウロの説教とはずいぶん違う。そのために、パウロはこのアテネで特別な説教を試みたと考えられています。そうかもしれませんが、それがどこまで特別なのか。ある人は、あまりにも特別で、言い換えると、あまりにもパウロらしくないから、これは本当はパウロがした説教ではないとさえ言うほどです。別の人々が語った説教ではないか、あるいはルカが考え出した説教ではないかとさえ言う人があるようです。

けれど本当にそうでしょうか。パウロはテサロニケでもベレアでも、旧約聖書に基づいて説教しました。アテネでも会堂で議論するときには、やはり聖書を持ち出したのではないかと思います。聖書の最初に、神は天地の造り主である、万物をすべてお造りになった方であるということが堂々と語られています。その話をここでしているだけです。

しかもここで、神は「手で造った神殿などにはお住みになりません」と語っています。この言葉を聞くと、パウロはおそらくこのアテネでも思い出していたのではないかと思います。それは使徒言行録がわたしたちに伝えてくれている、あのステファノの殉教の出来事です。使徒言行録は最初の殉教者ステファノが、パウロの目の前で石で打たれて殺されたことを書いています。このときに、ステファノが長い説教をいたしました。その説教の終わりに近いところで、やはりこう言っています。使徒言行録第7章47節以下です。「神のために家を建てたのはソロモンでした。けれども、いと高き方は人の手で造った

ようなものにはお住みになりません。これは、預言者も言っているとおりのことです。『主は言われる。「天はわたしの王座、地はわたしの足台。お前たちは、わたしに/どんな家を建ててくれると言うのか。わたしの憩う場所はどこにあるのか。これらはすべて、わたしの手が造ったものではないか』』。これは預言者イザヤが語った言葉です。

けれど、ステファノもおそらくこのとき知っていたのではないかと思いますが、神殿を献げたソロモン自身が、後にソロモンの献堂の祈りと呼ばれるようになった祈りのなかで、こう言っています。列王記上第8章27節以下です。「神は果たして地上にお住まいになるでしょうか。天も、天の天もあなたをお納めすることができません。わたしが建てたこの神殿など、なおふさわしくありません。わが神、主よ、ただ僕の祈りと願いを顧みて、今日僕が御前にささげる叫びと祈りを聞き届けてください。そして、夜も昼もこの神殿に、この所に御目を注いでください。ここはあなたが『わたしの名をとどめる』と仰せ

になったところですよ」。ソロモンも、神殿は祈る場所ではあるけれど、お住みになるところではないと言っています。神を納めてしまうようなところではない。そうはっきり言いました。

パウロは、このソロモンの祈りを正しく受け継ぐことなく、まるで神殿のなかに全能の造り主である神を閉じ込めることができたかのように思い込んで、それを非難するステファノを殺してしまったなかのひとりでした。パウロはそうしたことをみんなここで思い起こしていたかもしれませぬ。何か足りないことがあるかのように、ひとの手によって仕えてもらう必要はない。神殿に閉じ込められて、祭司たちに世話をしてもらうことによって生き延びるような神ではないのです。アテネの町にも至るところに神殿があり、そこに祭司がおり、また巫女たちがおり、その神に仕えていた。そのような仕える者たちの手によってようやく生きることができるような神ではないのです。

そうではなくて、「すべての人に命と息と、その他すべてのものを与えてくださるのは、この神」なのです。あなたがたが神を生かす必要はない。あなたがたが神に生かされているのです。そうパウロは言います。

「神は、一人の人からすべての民族を造り出して、地上の至るところに住まわせ、季節を決め、彼らの居住地の境界をお決めになりました。これは、人に神を求めさせるためであり、また、彼らが探し求めさえすれば、神を見いだすことができるようにということなのです」。すべてのものをお造りになった神は、最初にすべてのものを造って、その後は天高いところにいて知らん顔している、というのではない。季節ごとにわたしたちの生活の営みが決まってくる。その季節も結局は神さまがお造りになったものだ。自分たちはさまざまところで生きている。ギリシャ人として、ユダヤ人として生きている。これも神がお定めになったこと。それだけではない。「実際、神はわたしたち一人一人から遠く離れてはおられません」。神殿にも閉

じ込めることができない神というのは、それだけ高く天に、ひとの手を逃れておられるというのではなくて、思いがけず、わたしたち一人一人のそばにおられる。それに気づけばいい。それだけでいいのです。

「『我らは神の中に生き、動き、存在する』 / 『我らもその子孫である』」。これらは皆、当時のアテネの人たちが知っていたに違いないギリシャ人の詩人、思想家の言葉です。パウロはそれらを非難したり批評してはいません。もちろん、読み方によっては、わたしたちキリスト者と違った理解が生まれてしまいそうな言葉ですけれども、パウロはむしろそれらを積極的に引用しました。そして、「わたしたちはもう神さまのなかに働いている。神の手から逃れたところで自分勝手なことができると思わないほうがいい。この神の見えないみ手に気づいてもらいたい」と言っているのです。

「わたしたちは神の子孫なのです」。これはいろいろな翻

訳があるようですが、「神こそわたしたちの出発点」「神がわたしたちの出発の根源」という意味です。わたしたちがなぜ生きることができているのか。そのもとをたどっていくと、結局は神のみ手に帰する。そういう意味の言葉でもあります。神殿にも納めることができないような高くにおられる神が、わたしたちのまことに身近な存在として、今ここにあって、あなたがた一人一人に、いのちと息とを与えてくださっている。

わたしは今皆さんの心臓の音を聞くことはできませんが、かつてお母さんのお腹の中にいた頃、どんな心臓の音であったかを想像し思い出すことはできます。不思議な音でした。ですから、こうも思います。わたしたちは何でも自由にできるようになったと思っているかもしれませんが、自分の心臓ひとつ自由に動かすことができないのではないか。自分の心臓がどきどきと動いている。これは自分の手の届かない動きです。神さまが動かしてくださる。これはある意味、とても素朴な信仰の思いだろうと思っています。しかもその後わたしたちの

心臓の拍動数は15億回とされています。これは象であっても、ネズミであっても、犬も猫も一生の間に打つ心臓の拍動数は同じだそうです。本当に不思議な事です。

今動かしていただいている。神さまが動かしていただきます。このからだも神が造ってくださり、神がいのちを生かしていただきます。わたしたちがする呼吸もまた、神が与えてくださっているもの。そんなふうに、神さまのみ手はとても近いのです。

ところがわたしたちは考え違いをします。「わたしたちは神の子孫なのですから、神である方を、人間の技や考えで造った金、銀、石などの像と同じものと考えてはなりません」。わたしたちは偶像を造ってはならない。偶像を造って、神殿の中に祀り込んではならない。神としてあがめ安置してはならない。これは、神についての無知を意味する。しかも、この無知は、「ああ、そんなものか。そんなに愚かなのか」ということでは

すまない。30 節に「今はどこにいる人でも皆悔い改めるようにと、命じておられます」とあります。悔い改めるということは、この無知が罪であることを意味します。まことに高く、まことに近くおられる神について無知、鈍感であって、かえってそこで偶像を造り上げてしまって、その偶像によって、まことの神を求める自分たちのところをごまかして、満足させてしまう。それを悔い改めなさいというのです。

パウロはきっと、ギリシャ人だけがそうだとは思っていませんでした。ユダヤ人もそうしてきた。パウロはそう思っていたと思います。そして、パウロが今生きていると、キリスト者もまたまことの神をいつの間にか、自分たちが造った神殿に祀り込んで、偶像化しているのではないかと、問うたのではないのでしょうか。ギリシャ人であろうがユダヤ人であろうが、悔い改めを求める伝道者の言葉に変わりはありません。

「それは、先にお選びになった一人の方によって、この

世を正しく裁く日をお決めになったからです」。イエス・キリストがお生まれになり、地上を歩まれ、十字架につけられ、甦られたということは、人間の歴史のなかで神が定められた終わりが来ることをはっきりとされたということです。今日わたしたちは教会の暦では収穫感謝日とも言いますが、終末主日とも言います。週報の日付に記されています。これは魂の刈り入れの日でもあります。一年の終わりにわたしたちはこの一年を思い起こし、神の御前に自分がどうであったのかを振り返ります。その意味では、わたしたちは既に先立ってその終わりの日、終末が来ることを確認するのです。そして悔い改める者であることがここで明らかにされている、そういう日でもあります。

「死者の復活ということを聞くと、ある者はあざ笑い」

とあります。「どうせ、そんなくだらないことだと思った。またいつか話を聞かせてもらおう」と言うのですけれども、もう二度と話を聞く気になどなってはいません。

けれど、このパウロの言葉を聞いて、信仰に入った人たちもいました。その人たちの代表的な男性と女性の名前が書き記されています。アテネの教会の教会員第1号と第2号であったということもできるだろうと思います。

ここにも神さまの働きを読み取ることができます。「**知られない神**」に献げている祭壇に、皆の好奇心を満足させるような方法で姿を現すということはなさいません。そうではなく、偶像を造る無知の罪を明らかにされる神。そして、まことに思いがけない、御子イエス・キリストを甦らせる神としてここに姿を現される。けれど、それいがいに救いはない。アテネの人たちにとっても救いはない。

パウロはこの点では、いかにもアテネの人たちに分かるような、一見哲学的な言葉を使っているようですが、妥協しないで、主イエス・キリストの真理を語りました。18節に「**イエスと復活について福音を告げ知らせていた**」とあります。パウ

口は、このイエスと復活こそが福音であり、喜びの知らせであることを、どこにおいても妥協することはありませんでした。アレオパゴスの説教はあまりにも特別な説教ではなく、やはり同じ福音を語っただけでした。ただ、アテネの人たちには、アテネの人たちが分かるように語りました。ここで語られていることもまた、真理であることに変わりはありません。お祈りいたします。

主イエス・キリストの父なる神さま、パウロがアテネの人たちに向かって、どんな思いで説教したのか、思いを馳せませう。自分たちの知恵に溺れたり、好奇心に引きずり回されるのではなくて、自分たちの無知に気づき、主イエスを信じてもらいたい。そのことをだけを願っていました。あなたがたのこの内に在る、まことの神を慕うところに、今、主イエスが応えていてくださることを知ってほしいと、訴えたかったパウロです。わたしたちもまたあなたからの招き、呼びかけに応えて、ここに参りました。どうか一人一人がその同じところに生

きることができますように導いてください。感謝と願いを、主イエス・キリストのみ名によってお祈りいたします。アーメン

讃美歌 讃美歌 21-430-1 (とびらの外に)

献金 讃美歌 21-65-2

報告 週報の3頁を御覧ください。

祈 禱 それぞれの場で黙禱をお願いします。

主の祈り 讃美歌 21-93-5A(天にまします我らの父よ)

祝 禱 平和のうちに、この世へと出て行きなさい。
主なる神に仕え、隣人を愛し、
主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。
主イエス・キリストの恵みと、父なる神の愛と
聖霊との親しき交わりとが、
あなたがた一同と共にあるように。 アーメン

後 奏

<礼拝終了>